

令和5年度 学校経営計画に対する最終評価

石川県立飯田高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
1 主体的・対話的深い学びにより、知識・技能、思考力・判断力・表現力を育成する。	① 習熟度別の学習指導を推進し、個に応じた学力の伸長を図る。	模擬試験の英数国総合偏差値で60以上10%、55以上20%、50以上50%の3つの項目のうち A： 全て達成 B： 2つ達成 C： 1つ達成 D： 達成なし	1年 D 60以上 1.7% 55以上 8.3% 50以上31.7% 2年 A 60以上16.9% 55以上28.8% 50以上59.3%	成 果：震災前の11月進研模試では、1・2年生ともに上位層が増加した。また、両学年において数学で伸びが見られた。1月進研模試では、特に2年生において数学は中上位の学力を維持し、国語と英語においても中位層で伸びが見られた。 課 題：1年生における中上位層の育成。 改善策：震災により1月記述模試は予定日に実施できず、2月に本校と金沢会場で実施（受験率：1年92%、2年81%）した。各学年と教科でしっかりと連携し、春休み期間の学習指導や課題提供を通して生徒が前向きに学習に取り組み、意欲的に新学年をスタートできるようにする。
	② 予習・授業・復習のサイクルを確立し、自律的学習習慣を定着させる。	進路アンケートで授業外での学習時間が学年＋1時間の生徒の割合が A： 70%以上 B： 60%以上 C： 50%以上 D： 50%未満	D 1年10.3% 2年 7.8%	成 果：震災により、1月の始業式の日に予定していたアンケートは実施できなかったが、後日1・2先生の担任の先生のご協力で9～12月の学習時間について集計することができた。1年生は昨年度並みの割合を維持し、2年生は昨年度と比べて増加した。 課 題：生徒が落ち着いて学習に集中できる環境の整備。 改善策：対面授業に加えてオンラインによる授業や課題配信をすることで、生徒の学ぶ意欲を刺激し、前向きな気持ちで学習できるように、学年・教科が一丸となってサポートする。
	③ 公務員試験に対応できる幅広い知識と情報処理能力を育成する。	公務員模試でのBランク以上の生徒の割合が A： 60%以上 B： 40%以上 C： 30%以上 D： 30%未満	D 14%	成 果：Bランク以上の生徒の割合が14%と例年より低い結果となった。 課 題：Cランクの生徒が57.1%を占めた。 改善策：個々の苦手分野を把握し、個別指導を徹底する。
	④ 多角的に考察できる学習課題を精査し、取り組ませることで、思考力を育成する。	授業改善アンケート項目⑥「この授業で学力がつく」⑩「友人と意見を共有することにより理解を深めることができる」の評価が A： 90%以上 B： 80%以上 C： 70%以上 D： 70%未満	A ⑥92.1% ⑩93.5%	成 果：授業改善アンケート項目⑥ならびに⑩について、A「あてはまる」B「だいたいあてはまる」の肯定的評価の合算が、どちらも90パーセントを超えている。 課 題：更に割合を向上させたい。 改善策：PT教員による研究授業を題材とした授業の研修会により、教員の授業力を向上する。
	⑤ 読書を通して、知識や教養を高め、生き方や社会問題を考えることで深い学びにつなげる。	図書室主催のイベントや探究学習などを通じて図書室の年間利用率が A： 45%以上 B： 40%以上 C： 35%以上 D： 35%未満	D 27%	成 果：利用率が11%から27%に伸びた。 課 題：5月の被災から耐震書架の設置まで、図書室の開架スペースが少なく、貸し出し可能な本が限定された。 改善策：1月の震災により、再度職員・生徒・ボランティアで期間を設定し棚の整理にあたっている。
学校関係者評価委員会の評価	・学校に通えない状況でも、医学部への合格者を出したことに飯田高校OBとして誇りに思う。校章の「蛭雪の功」をまさに実現した形で、後輩もそれに続いてほしい。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善指導	・他の3学年の生徒もしっかり結果を出すことができた。また、来年受験を控えている2学年では、春休みを利用して「勉強合宿」の計画をしている。			

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	判定基準	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
2 効果的なICT機器の活用法を研究し、各教員の授業力を向上させるとともに、そのノウハウの共有によって学校全体の教育力を高める。	① GIGA校内研修年間計画に基づいて研修を進める。	授業で5回以上1人1台端末を用いた授業をした教員が A：80%以上 B：60%以上 C：40%以上 D：40%未満	A 81.5%	成果：目標をクリアしている教員が過半数を占めているが、苦手意識を抱えている教員もいる。 課題：今後もタブレット端末の活用を継続していく。 改善策：ICT機器も活用したPT教員の研究授業を活用して、教科研修会を設定する。
	② 生徒の主体的な学習姿勢を涵養するため、タブレットを用いた授業を推進している。	1人1台端末を活用した授業では、主体的に学習しようとする意欲が高まると感じた生徒が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	A 89.2%	成果：肯定的な回答をした生徒が85%となっている。 課題：昨年から若干減少している。 改善策：ICT機器も活用したPT教員の研究授業を活用して、教科研修会を設定する。
	③ ICT機器の活用によりペーパーレス化を図るなどして、業務の効率化を図る。	ICT機器の活用により業務の平準化・効率化が進んだと感じる教員が A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	A 96.8%	成果：情報周知や、資料の共有が進んで効率は上がっている。 課題：ICT機器に追われているという印象を持っている教員がいるようである。 改善策：質問の文言の改善により、アンケートと回答のミスマッチを防ぎたい。
学校関係者評価委員会の評価	・震災によってオンライン授業を行っていると思うが、効果や改善点を伺いたい。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善指導	・黒板に書いた文字が小さくて見えない場合や、電波の状況が悪いときは会話が途切れてしまい話が聞き取りづらい時がある。オンライン授業で効果を上げるための勉強会を教員同士で開催したい。			

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	判定基準	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
3 学校行事や部活動、ゆめかな等の活動を通して、円滑な社会生活を送る資質を養い、人間力を育む。	① HR活動や委員会活動を通して、集団における人間力を育む。	意見交換を行い、協働した取り組みが日常的に出来たと考える生徒の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	A 全体87.3% 1年82.8% 2年89.6% 3年89.7%	成果：全学年で、意見交換を行い協働した取り組みが日常的に出来たと回答していた。 課題：1年生で、あまり出来なかったと13.1%が回答していた。 改善策：1学年で「あまり出来なかった」理由を分析し、次年度の取り組みに繋げる。
	② 学校行事や部活動における自己目標を明確にして、積極的に取り組む人間力を育む。	学校行事や部活動で自己目標を明確にし、積極的に取り組んだと考える生徒の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上	A 全体90.8% 1年84.8% 2年91.5% 3年96.6%	成果：全学年で、自己目標を明確にし積極的に取り組んだと回答していた。 課題：1年生で、あまり出来なかったと12.0%が回答していた。 改善策：1学年で「あまり出来なかった」理由を分析し、次年度の取り組みに繋げる。
	③ 挨拶、身だしなみ、交通ルール遵守など、社会生活の基盤を身に付ける。また、生徒一人一人が「いじめのない学校づくり」を心がける。	集団や個々の場面でも、いじめのない学校づくりを意識して規則や規律を守ることが出来た生徒の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	A 全体95.2% 1年93.9% 2年94.3% 3年97.7%	成果：全学年で、いじめのない学校づくりを意識し規則や規律を守れたと回答していた。 課題：1年生の「十分にできた」の回答数は、2・3年生の7割に留まった。 改善策：1学年で、学年集会やHR等での指導内容を分析し、次年度の取り組みに繋げる。
	④ ボランティア活動や、地域行事への参加を積極的に進め、地域社会の一員として人間力を高める。	地域行事やボランティア活動を通して地域に関わろうとする意欲が高まった生徒が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	D 全体33.9%	成果：積極的な活動が出来なかった。 課題：5月の震災のこともあり、地域行事が復活していない。 総体や新人大会の時期と重なり、部活動を優先した。 震災関係のボランティアなどは危険もあり、積極的には進めなかった。 改善策：部活動単位での活動はもちろん進めるが、個人の活動をPRしていきたい。
	⑤ 他者や地域と協働した探究学習を行うことで、学びに対する前向きな心を育む。	「自らが学びの主導権を握り、自律的な学びを進めることができている。」と回答する生徒が A：70%以上 B：60%以上 C：50%以上 D：50%未満	A 全体91.6% 1年78.2% 2・3年98.3% (11/24アンケート結果より)	成果：2・3年生の自己評価がAの基準を大きく上回る結果となった。 課題：1年生の21.8%が「できていない」「あまりできていない」と回答している。 改善策：1年生の探究の自由度を高め、学びのモチベーションを向上させていく。
	⑥ 地域学や、観光ビジネスなどの授業を通して、地域社会との連携を深め、異世代との交流を持つことでコミュニケーション能力を育てる。	異世代の方との交流を深めることで、コミュニケーション能力を高めることが出来たと思う生徒の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	A 全体91.8% 1年85.5% 2年94.1% 3年96.0%	成果：1年生は地域を知ることが主であった。2、3年生は、回数を重ねるごとにその成長が見受けられ大きな成果が見られた。 課題：対人関係に苦手意識のある子も多くなっているため、このような子たちへの対応がわからない。 改善策：交流の場を増やしたり、大人とコミュニケーションをとる機会を増やしていく。
学校関係者評価委員会の評価	・このような時期だからこそ、地域や近隣住民と連携しボランティア活動や、出前授業など安全面に配慮した上で様々な活動してほしい。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善指導	・現在、生徒会を中心にボランティア活動を計画している。春休みやゴールデンウィークなどを利用して、実施できたらと考えている。			

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	判定基準	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
4 地元中学校や地域社会と連携した取組により、6年間を見通した生徒の成長を図る。	① 各教科の授業や探究学習において地元小・中学校との接続・連携を推進する。	地元小・中学校と連携した授業回数が A：10回以上 B：5回以上 C：3回以上 D：3回未満	D 1回	成果：震災の影響でキャンセルになったものがあつた。本校で開催した体験入学で中学3年生対象に授業を実施した。また、2学期に中高連絡会や互見授業などで接続・連携を行った。 課題：コロナ禍から活動が滞っている。 改善策：震災のことを考慮すると、連携強化が必須である。できることから行っていきたい。
	② 金沢大学能登学舎やNPO法人ガクソーなど地元外部機関との連携を強化する。	金沢大学能登学舎(市内三崎町)・NPO法人ガクソー(市内飯田町)・探究ルーム(校内、外部の方が滞在しているとき)を利用した生徒の延べ人数が A：100名以上 B：75名以上 C：50名以上 D：50名未満	A 114名	成果：年間通して外部機関との協力関係を維持し、生徒の学びを後押しできた。 課題：探究ルームの利用が、特定の生徒に偏る傾向がある。 改善策：さまざまな生徒が訪ね利用できる場づくりのための方策を検討する。 (ex. 放課後の時間などを使って定期的に講演会や体験会などのイベントを開催する)
	③ 地元産業に貢献する人材育成のため企業見学会や講演会を実施する。	地元への興味・関心や貢献意欲が高まった生徒が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	B 74%	成果：11月に1・2年ビジネスコースを対象に「ふるさと企業を知る会」を実施した。この会を機に「地元就職もあつたかな？」と回答した生徒が51%を占め、「元々地元就職」の希望者を合わせると74%が地元就職に興味を示した。 課題：「興味がある企業がない」と答えた生徒が16%を占めた。 改善策：企業や県との連絡を密にし、講演内容や生徒の情報などの擦り合わせを行う。
	④ 部活動で身につけた技術を活かし、小中学校との交流を行い、地域に貢献できる人材を育成する。	小中学校との交流行事を通して地域貢献意欲が高まった生徒が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	A 全体95.3%	成果：野球部の野球教室や、吹奏楽部とバスケットボール部の合同練習などが行われ、大変喜ばれた。 課題：交流活動を行っている部活動が少ない。 改善策：生徒会係より積極的な声掛けをしていく。
学校関係者評価委員会の評価	・地域のNPO法人である「ガクソー」の協力のもと成り立っている探究ルームは総合的な学習の時間である「ゆめかなプロジェクト」のみの利用に限定されているのか。それとも教科指導なども行っているのか。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善指導	・探究ルームの利用用途は限定していない。ゆえに教科についての質問や進路についての相談もすることができる。最近では、登校が困難な生徒も利用しており、カウンセリングとしても利用できる。			

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	判定基準	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
5 教職員自らが効率的な業務や指導法の改善に努め、ワークライフバランスを実現する。	① 若手教員早期育成プログラムの推進と併せ、研究授業や互見授業により授業改善を図る。	教員として成長できたと感じられる。 (ア)よくあてはまる (イ)あてはまる (ウ)あまりあてはまらない (エ)あてはまらない (ア)が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	C 61.1%	成 果：前期の反省を踏まえ、テーマ設定や告知の仕方を工夫した。また、年度当初作成した年間計画よりも、進路指導を中心に様々なカリキュラムを行うことができた。前期よりも「よくあてはまる」と回答した教員の割合が増加した。(58%) 課 題：「あまりあてはまらない」と回答した教員もいた。 改善策：4年目以降の先生方でも興味・関心の湧くテーマを模索し、より充実した取組にしたい。
	② 授業改善アンケートの結果をもとに授業改善を図り、分かりやすい授業を展開する。	授業が分かりやすいと感じた生徒が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	A 87.5%	成 果：授業改善アンケートで、A「あてはまる」B「だいたいあてはまる」の肯定的評価の合算が、90パーセントを超えている。 課 題：この割合を減らさないよう、さらなる向上を目指したい。 改善策：ICT機器も活用したPT教員の研究授業を活用して、教科研修会を設定する。
	③ 研修などを通してカウンセリングマインドを涵養し、多様な生徒への指導力を高める。	研修会で得た知識などを実践しようとしている教員が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	A 100%	成 果：今年度は開催を10月に早めた。研修会で得た知識などを実践してみたいと「思う」「まあまあ思う」と答えた回答が100%であった。 課 題：開催の時期についてももう少し検討し、さらに充実した研修会を目指したい。 改善策：アンケートをもとに今後の研修会についてテーマを検討する。
学校関係者評価委員会の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・教員の疲労感が見て取れる。生徒への熱心な指導もありがたいが、自重・自愛していただきたい。 			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善指導	<ul style="list-style-type: none"> ・リフレッシュウィークや定時退校日を積極的に利用し、教員の多忙化改善に努めていく。 			